

馬場孤蝶

霰降る夜

霰降る夜

一葉女史の日記『水の上』の二十八年五月二十六日のところに左の如くある。

「馬場君、平田ぬしつれ立て川上眉山君を伴きたひ来る。君にははじめて逢へる也。としは二十七とか。丈たかく色白く、女子の中にもかゝるうつくしき人はあまた見がたかるべし。物いひて打笑む時、頬のほどさと赤うなるも、男には似合はしからねど、すべて優形やさがたにのどやかなる人なり、かねて高名なる作家とも思おほえず、

心安げにおさなびたるさま、誠に親しみ安し……眉山君は春の花なるべし。つよき所なく艶なるさま京の舞姫をみるやうにて……」

眉山君は全く綺麗な人であった。頬に何時も血色のうるわしい赤みがさして、顔の色が如何にも綺麗に見えた。鼻筋も通っていたし、眼もいかにも優しかった。唯少し身体は勿論すべての道具立てが大き過ぎた。せえは五尺七寸位は確にあつたらうし、骨格もそれに伴って骨太であった。眉山君にして責めて丈がもう三寸位低く、顔の道具立があのまままで小さかったら、全く女にも余り

ないような綺麗さであったろうと思う。眉山君は身体が大振りであったがために、その顔立ちの優しさ、美くしさが余程消されてしまっていたと云って宜かろう。そういう感は、後年になるとますます眼立って来たように思う。

それに、天二物をかさぬというところであったろうか、あれ程綺麗であった眉山君の顔にも、一ヶ所欠点はあった。右であったか、左であったか、今明らかに記憶しないが、小鼻の片側の方だけ潰ぶれたようになっていて、その側かわから見ると、眉山君の容貌が見劣りがするのであった。

川上君自身がそれを云うまで吾々のうちでは誰もそれに気がついた者はなかったようだ。『文学界』連中のと一緒に写真をとる時に、眉山君は『僕は片っぽの鼻の先きの形が悪いから、いい方から写して貰らわなきやアいけない』と云って、身体の向きを変えるか何うかしたのを覚えている。成る程そう云われてからは、眉山君の鼻頭に僕も気がつきだした。

「何処かの子どもがね、竹馬に乗っていて『やア此のおじさんの頭には一銭銅貨が載っかってらア』と云ったよ」

眉山君は、当時龍岡町にいた僕の家へたずねて来て呉れた時か何かに、そう云って笑って話した。眉山君の頭の頂辺の禿の方はその前から僕も気がついていた。

そんなような或る日のことであつた。眉山君はあぐらをかいて坐り込んでいたが、下帯なしだと見えて、前が少し開いて見える。もう当人が気がつくかと思つて、受け答えをしているのだが、一向に気がつきそうでない。こちらはこちらでなるべくその方は見ないようにはしているものの、何うも気になつていけない。到頭、そのことを注意すると、眉山君も大笑しながら、前を繕つた。

「もっと早く云ってくれればいいのに、さんざん見といたあとで、注意するのなんぞは、人が悪いじゃないか」
「イヤ、君の方で早く気がついてくれればいいと、先つきから、しきりに祈っていたんだよ」

僕はそう云い分けをしたと思う。

「僕の知ってる男で、道を歩るいていと、後から、もしもと呼びかけられたんで振り返ると自分の下帯が結んだままで、スポリと抜け落ちたと見えて、路の上花落つこちていたというんだがね。随分呑ん気な男もあつたものだね」

眉山君のそういう話は、此の時間いたのではなかった
かと思う。

日本文学電子図書館

霽降る夜

著 者：馬場孤蝶

制作者：宮澤一郎

底 本：「明治文壇の人々」、
ウェッジ文庫版

2009年10月26日 第1刷発行

日本文学電子図書館